

牛・闘・銃・獵

靖 上 井



新潮文庫

りよう じゅう とう ぎゅう
獵 銃・闘 牛



定価はカバーに表
示してあります。

新潮文庫 草 63 A

昭和二十五年十一月三十日 発行
昭和四十一年十月三十日 二十七刷改版
昭和四十九年八月三十日 三十九刷

著 者 井 上 靖

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

郵便 番 号 一六二
東京 都 新宿 区 矢来 町 七 一
電 話 業 務 部 (〇三)(二六六)五一一
編 集 部 (〇三)(二六六)五四二
振 替 東 京 八 〇 八 番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

新潮文庫

獵銃・闘牛

井上靖著



新潮出版

目次

獺

銃

.....七

鬪

牛

.....充

比良のシャクナゲ

.....二四七

解説 河盛好藏

獵銃・闘牛

獺

銃

私は日本獵人俱樂部グラブの機関誌である「獵友」と言う薄っぺらな雑誌の最近号に「獵銃」と題する一篇の詩を掲載した。

斯う言うと、私は狩獵に多少なりとも関心を持っている人間のように聞えるかも知れないが、もともと殺生を極度に嫌きらう母親の手に育てられて、未だ曾て空氣銃一挺手ちようにした経験はないのである。たまたま「獵友」と言う雑誌の編輯へんしゅうに当っているのが、私の高等学校時代の級友で、いい年をして未だに詩の同人雑誌から足を洗えないで、自己流の詩を作っている私に、怖おそらくは、彼のほんのその場の気まぐれからと、それに久濶きゅうかつを叙すると言った程度の、儀礼的な意味をこめて、一篇の詩を依頼して来たまでの事である。何分雑誌が自分などには縁のない特殊な雑誌であるし、先方の注文も、何か狩獵に關係のあることに取材してとあったので、平生の私なら、一も二もなく執筆をことわる筈であったが、丁度その頃、ふとした事から獵銃と言うものと、人間の孤独と言うものの關係に、詩的感興をそそられて、いつかこのモチーフを作品にしてみよう、と考えていた矢先だったので、これは至極かつこ恰好な発表場所だと思つて、十一月も末の、漸ようやく夜寒がきつく感ぜられ出したある夜、十二時過ぎまで机に向つて、私流儀の一篇の散文詩をものして、翌日さっそく「獵友」編輯部へ送ったのであった。

さてその散文詩「獵銃」なるものであるが、これから書こうとするこの手記に多少の繋がりを持つていたので、一応、次に書き写してみることにする。

その人は大きなマドロスパイプを銜え、セッターを先に立て、長靴で霜柱を踏みしだき乍ら、初冬の天城の間道の叢をゆっくり分け登って行つた。二十五発の銃弾の腰帶、黒褐色の革の上衣、その上に置かれたチャーチル二連銃、生きものの命断つ白く光れる鋼鉄の器具で、かくも冷たく武装しなければならぬものは何であろうか。行きずりのその長身の獵人の背後姿に、私はなぜか強く心惹かれた。

その後、都会の駅や盛り場の夜更けなどで、私はふと、ああ、あの獵人のように歩きたいと思うことがある。ゆつくりと、静かに、冷たく――。そんなときまって私の脇の中で、獵人の背景をなすものは、初冬の天城の冷たい背景ではなく、どこか落莫とした白い河床であつた。そして一個の磨き光れる獵銃は、中年の孤独なる精神と肉体の双方に、同時にしみ入るような重量感を捺印しながら、生きものに照準された時は決して見せない、ふしぎな血ぬられた美しさを放射しているのであつた。

この時の掲載誌が友から送り届けられ、その頁をばらばらとめくつた時、迂濶な私は、その時初めて、自分の作品が「獵銃」と言うもつともらしい題は附けられてはいるものの、凡そこの雑

誌には不似合のもので、各処に散見する猟道だとか、スポーツマン・シップだとか、あるいは健康な趣味とか言つた種類の言葉と、余りにも判然りと反撥し合つていて、私の詩の組み込まれている頁だけが、まるで一つの居留地のように、孤立した全く別個の特殊地帯を作り上げている事に氣附いたのである。言うまでもなく、私がこの作品に盛つたものは、私が私の詩的直観によつて把握した熊銃と言うものの持つ本質的な性格であつて、それが言い過ぎなら、少くともそれを意図したものであつて、その点からは私は自負をこそ持て、些かも卑下するには当たらないものであつた。若しこれが他の雑誌に載つたのなら、勿論そこに何の問題もないわけであるが、それが狩猟を最も健康闊達な趣味として宣伝する事を使命としている、日本猟人倶楽部の機関誌であるだけに、その中にあつては、私の熊銃観は、大なり小なり、異端視され、敬遠さるべき性質のものであつた。斯うしたことに氣附くと、今更に最初私の詩稿を手にした際の友の当惑も察しられ、しかも怖らくは少からぬ躊躇を持つたであらうが、敢てこれを掲載した、如何にもその友らしい私に対する細い神経の配り方も想像されて、私はその当初その事で心痛んだものであつた。そして若しかしたら猟人倶楽部の誰からか抗議の一つぐらひは貰うかも知れぬと思つたのであつたが、それも私の杞憂にすぎなく、何時まで経つてもそれらしい一枚の葉書も舞い込んで来なかつた。幸か不幸か、完全に私の作品は、全国の猟人たちから黙殺の待遇を受けたのであつた。あるいはもっと適当に言うならば、全然読まれなかつたかも知れないのである。そしてこの事が私の念頭から全く忘れ去られて終つた二箇月程経つたある日、三杉穰介と言う全くの未知の人物から一通の封書が送られて来たのであつた。

泰山の古碑の一つに刻まれてある文字について、後代の史家が、野分の去った後の、あの白い陽の輝きに似ている、と評しているのを読んだ事があるが、私が手にした白い和紙の大型封筒の上に見出した三杉穰介の文字は、少し誇張して言えば、まさにそのような文字であった。今は既に湮滅して、その古碑の一枚の拓本すら残存していない今日、その筆蹟がいかなる風韻格調を持つものであるかは、もとより想像すべくもないが、三杉穰介の封筒からはみ出しそうに書かれた大きな草書体の文字が、一見豪宕な感じのする派手な達筆でありながら、そのくせ暫く眺めると、一字一字の字面から、一種の空虚感のようなものの吹上げて来るのが感じられ、私はふと、泰山石刻の書に対する前記の史家の評言を思い浮かべたものであった。墨をたつぷりと筆に含ませ、封筒を左手に持って、一気呵成に筆をすべらせたと思われるのだが、その筆勢には、所謂枯れたとは違った、妙に冷たい無表情と無関心が覗いていて、いい換えれば、その自在な筆勢にのっけからいい気持になっていない、いかにも近代人らしい自我も感じられ、世の達筆なるものの持つ俗臭や嫌味はなかった。

それは兎も角、私の家の粗末な木製の郵便受の中に発見するには、その手紙の堂々たる風格は、少々場違いの感のある派手なものであった。封を切ってみると、間余の画仙紙に一行五六字の大ぶりの文字を同じ自在な筆で走らせてある。——自分は些か狩獵に興味を持つものであるが、先頃偶然に「獵友」誌上に御高作「獵銃」を拝読する機会を得た。自分は生来の無法者で、もともと詩の風雅には無縁の徒であり、有体に申上げると、詩と言うものを読んだのは後にも先にも今回が最初であって、失礼ではあるが、御尊名にも初めて接したような次第であるが「獵

銃」を拝読して近頃にない感動を覚えた。——大体斯う言つた書き出しで、私はこれに最初目を走らせた時、忘れかけていた散文詩「獵銃」の事が思い出され、いよいよ狩獵家からの、それも相当の相手から抗議文が舞い込んで来たと思つて、一瞬心に緊張を感じざるを得なかつたのであるが、読み進むにつれ、手紙の内容はかかる自分の予想とは全く異つたものである事が解つて来た。其処には全く私の予期せぬ事が綴られてあつたのである。三杉穰介は終始礼讓を失わぬ鄭重な言葉遣いで、併し他面その筆蹟の如く一種の自恃と冷靜さを忘れない頗る整つた文章で、「獵銃」の中に書かれてある人物は、怖らく斯く言う自分であらうと想像するがいかであるるか、十一月初め天城の獵場に出掛けた折、山麓の村の何処かで、はしなくも私ののっぽな背後姿が目にとまつた事であると思う。雉専門に調教してある黒と白の斑らのセッター、倫敦にある時恩師より拝領したチャーチル、それに愛用のパイプまでお目にとまり、恐縮至極に存じている。なおその上、私の悟りに遠いお恥ずかしい心境まで御詩境に適い、光榮に存ずるし、面映ゆくも感じ、詩人と言う特殊な方の非凡な炯眼に今更ながら感服した次第である。——此処まで読んで、私は改めて、彼の言う如く、伊豆の天城山麓の小さい温泉部落で、五カ月程前のある朝、散歩に出た杉林の中の細い道で、ふと行き会つた一人の獵人の姿を新しく思い描いてみようとしたが、その時私の眼を惹いたその獵人の妙に孤独な背後姿の漠然とした印象以外、何一つはつきりとは思ひ出す事はできなかった。背の高い中年の紳士と言う以外、その人物の容貌は勿論のこと、その年恰好もはつきりした映像をもつては浮かび上つて来なかつたのである。

もともと私とて何も特別の注意をもつて、その人物を観察したわけではなかつた。獵銃を肩に

して向うからやって来る一人の紳士の、パイプを銜えている姿が、普通の狩猟家とは違って、何か思索的な雰囲気ふんいきをその周囲に持つて居り、初冬の朝の冷たい空気の中で、それがいやに清潔に眼にしみて浮かび上つて見えたので、その時私は思わずすれ違った後でその人物を振り返つて見たまでの事である。するとその人物は歩いて来た小道から外それて、雑木の生い繁っている山へと道をとつて、長靴のすべるのを気にしている風にゆつくりと、かなりひどい急斜面の道を、一歩一歩踏みしめながら登つて行くところで、それを暫く見送っている私の眼には、その背後姿が作品「獵銃」に書いたように、何故かひどく孤独なものとして映つたのであつた。その時、その獵人の連れている獵犬が見事なセッター種である事ぐらいの知識は私も持合せていたが、その人が肩にしている獵銃が何であるかの鑑識眼は、狩獵に縁の遠い私が持つていよう筈はなかつた。獵銃の最高級品がリチャードカチャーチルであると言う事を知つたのは、全く後日散文詩「獵銃」をものする際の一夜づけの知識であつて、私は全く自分の一存から、作品の中で勝手に紳士の肩に英国製高級銃を置かしめたのであつたが、それがたまたま實際の人物三杉穰介の持物と偶然に一致したわけであつた。そんなわけで、いま散文詩「獵銃」の主人公が自分だと当の本人から名乗り出られても、ああそうかと思うだけで、私の觀念の实体たる三杉穰介は依然として私には未知の人であつた。

その三杉穰介の手紙は更に続いていた。——突然變な事を申上げて御不審に思ふかも知れないが、私は今ここに私宛の三通の手紙を持つてゐる。私はこれを焼き棄てるつもりであつたが、御高作を拝見して貴方と言う人物を知り、ふとこの手紙を貴方にお見せしてみたい氣持が起つた。

御静境を煩わして甚だ相すまぬ次第だが、別便で三通の手紙をお送りする故お暇の折読んで頂けないか、読んで頂きたいと言う以外べつに些かの他意もない。私と言う人間が覗き見た貴方の所謂『白い河床』なるものが、如何なるものであるか知って頂きたいと思うのである。人間と言うものは愚かなもので、自分と言うものを所詮は誰かに知って貰いたいものである。私はそうした気持をついぞ今まで持った事はなかったのだが、私と言う人間に特殊な関心を示して下さい。貴方と言う方のあるを知って、ふと貴方に何もかも知って頂きたい気持になったのである。お読みになった後は、手紙は三通とも私に代って破棄して戴けたら結構である。なお伊豆で私の姿がお目にとまったのは、私がこの三本の手紙を入手した直後のことかと思われる。併しながら、そもそも私が狩猟に興味を持つに至ったのは数年の昔に遡り、現在の天涯孤独の身とは異なり、公私両生活において先ず先ず破綻なき時期、既に獵銃は私の肩にはなくてはならぬもののようにであった。このこと一筆申添えさせて戴く。――

私がこの手紙を読んだ翌々日、前の手紙と同様『伊豆旅館にて、三杉穰介』と言う差出人の名で、三通の手紙が送られて来た。それは三杉宛の三人の女性の手紙で、私はこれを読んで、いやこの手紙を読んだ後の私の感懷をここに記すことはやめよう。以下この三通の手紙を書き写してみようと思うのだが、最後に一言、私には三杉なる人物が社会的に相当の地位を持った人のように思われて、一応、紳士録、人名録その他をくってみたが、ついにその名を発見できなかったこと、おそらくはそれが、彼が私のために用いた仮名であろうと言うことを附記しておく。なお手紙を写すに当り、多くの墨で抹殺してある箇処のうちで、明らかに彼の本名が記されてあったと

思うところには三杉穰介の名を当て、文中に登場する他の人物は、すべて仮名を用いた事をお断りしておく。

薺子の手紙

おじさま、穰介おじさま。

母さんがお亡くなりになってから、早いもので、もう三週間経ちました。昨日あたりからお悔み客もなくなり、おうちの中も急にひっそりして、母さんがもうこの世にいないのだ。と言う淋しさが、漸く実感となつて、心にしみ込んで来るようになりました。おじさまは随分お疲れでございましたでしょう。お葬儀一切の事、親戚への御通知からお通夜のお夜食の御心配まで、何から何までなさった上、母さんの死があんな特別なものでしたから、警察へも私に代って何回もお運びになり、万端御配慮戴きました事は、何ともお礼の申上げようもない次第でございます。あれから直ぐ、今度は会社のお仕事で東京へお出掛けになったのですから、どうかお疲れが一度に出なければよいがと案じて居ります。

でもお立ちになる時の御予定では、今日あたりは、既に、東京のお仕事もおすませになり、私も知っているあの、明るいが、どこか総体に冷たく沈んだ瀬戸物の絵のような、伊豆の美しい雑木林の風景に見入っていらっしやるのではないかと想像して居ります。伊豆御滞在中にこのお手紙を読んで戴こうと思って、薺子はペンをとりました。